

芥川龍之介小説にみる生の欲動と死の欲動の葛藤

長行司研太

〔抄 録〕

本論の目的は、Freudの生の欲動Lebenstriebと死の欲動Todestrieb理論を再考し、「生きるとは何か」を考えることである。その題材として、芥川龍之介とその作品を扱い、生の欲動と死の欲動の葛藤をそこに見出すという方法を用い、分析を試みた。芥川の生き様と欲動理論を照らし合わせた結果、浮かび上がってきたのは芥川の一生を貫いた「孤独」であった。孤独は不安を呼び起こし、更には羨望や罪悪感などをも喚起し、それらは重なり合って、他人とのつながりを阻害する。しかしそれでも人は人を求める。生の欲動の顕現である愛を、人は欲しているのである。人とのつながりはこの世とのつながりであり、その楔としての役割を「特別な存在」となつて果たすことが、我々がセラピストである一つの意義といえるだろう。本論で導き出される一つの答えとして、「生きるとは『愛の探求』である」と結論づけた。

キーワード Freud, 死の欲動, 芥川龍之介, 孤独, 愛

はじめに

Freudの理論の中に、生の欲動Lebenstriebと死の欲動Todestriebというものがある。人には生に向かう、すなわち生きようとする傾向と、それとは反対に死に向かう傾向があり、その両者のせめぎ合いの中で人は生きていくとする仮定から導き出された理論である。生の欲動と死の欲動が人に内在し人類単位で通底しているとするならば、それは現代社会においても何らかの形で我々の前に顕現していると考えて差し支えないだろう。人が死ぬことは自然の摂理で、ある意味仕方ないことだともいえるが、その半ばで自ら命を絶つということは自然ではないように思う。自ら命を絶つこと、すなわち自殺は現代社会においても深刻な社会問題となっている。なぜ人は自らの命を絶つことを選択するのだろうか。人を死に向かわしめる死の欲動は自殺とどのように関連しているのだろうか。

自殺だけでなく、死という事象は必ず人に訪れるものであり、避けようのないものである。常にわれわれのそばに存在しているわけであるから、死について考えることは自然なことであ

ろう。Freudが述べた生の欲動と死の欲動について今再考することは、現代社会で問題視されている自殺、ひいては人の死について再考することになると考える。そうして死に思いを巡らせ、死を意識することは、翻って生きることをより意識することになり、「生きるとは何か」を考えることになるのではないだろうか。

その「生きるとは何か」を考えるための題材として、芥川龍之介とその作品を扱う。芥川龍之介は35歳でその生涯を自殺という形で終えた小説家であり、彼は自身を破滅へと導く「運命」に怯えながら「ぼんやりとした不安」に包まれ、心身の消耗を余儀なくされた。そこに生の欲動と死の欲動の存在を鑑みることは、可能であろう。さらに、芥川龍之介の描いた小説は死を題材にしたものが多く、特に晩年の作品からは芥川龍之介の死生観が滲み出ている。それから小説の中に生の欲動と死の欲動の葛藤を見出し、そこから論を展開することで、生の欲動と死の欲動という概念を再考することを試みる。芥川龍之介自身の幼少期や母に対する思い、そして人間観なども含め考察を巡らしていく。

I 生の欲動と死の欲動

1 Freudの欲動論

1-1 生の欲動Lebenstriebと死の欲動Todestrieb

生の欲動Lebenstriebと死の欲動Todestriebは『快感原則の彼岸』（1920）においてFreudによって導入された概念である⁽¹⁾。

生の欲動は性欲動ないしErosともよばれ、「たえずより大きな統一を作成し、それを保持しようとする」（Freud, 1938）⁽²⁾ことを目的とし、「拘束」の原則を持つものである。また、Freud（1923）が、「この欲動には、制止されていない本来の性欲動、ならびに、そこから転じて目標制止されたり昇華されたりした欲動の蠢きが含まれているばかりでなく、自我がもっているとみなさざるをえない自己保存欲動も含まれている」⁽³⁾と述べているように、それは人間が自らの生命を維持し日々の生活を営むための原動力ともいえる。

一方、死の欲動は生の欲動とは反対に、「集合を解き、事物を破壊する」（Freud, 1938）ことを目的とするものであり、すべての有機的生命体が無機的状态に戻ろうとする基本的傾向である。すなわち、生物はもともと無から発生したものであるから、その無だった頃の状態に戻るため、死に向かう傾向が備わっているというものである。このことからFreud（1920）は「あらゆる生命の目標は死である」と結論づけている。

人間はこの「生きよう」「死のう」と対立する二つの欲動の葛藤に、常に晒されて生きていかなければならないとFreudは考えたわけである。

Freudが1920年にこれらの欲動の存在を提唱する以前にも、すでにFreudは二元的な欲動論を提唱していた。いったいどのように欲動論は展開され、生の欲動と死の欲動という二つの概

念に至ったのであろうか。

1-2 欲動二元論の変遷

Freudの思索の出発点となった問題は精神の二元論であった。精神の内部における深い葛藤という概念に思いを巡らしたFreudは、『心因性視覚障害の精神分析的理解』(1910)において、「とくに重要なことは、性つまり性的快感の獲得に役立つ欲動と、個体の自己保存を目的とする欲動つまり自我欲動との間に否定できない対立が存在するということである。」と述べ、人間の精神活動の中に性欲動と自我欲動との対立を仮定するに至る⁽⁴⁾。この対立が心的葛藤を引き起こし、さまざまな疾患の根源になるというFreudの見解は、初期欲動理論の中核を担うものであるが、しかし『ナルシズム序説』(1914)において、この対立に変化の兆しが見られることとなる⁽⁵⁾。

Freud (1914) はナルシズム概念を提唱するに当たって、「(自己愛は) 自己保存欲動のエゴイズムをリビドーの面で拡充するものである」と述べ、自己愛の中に自我欲動(自己保存の欲動)が含まれねばならないと感じるようになる。そして、性欲動を、外的対象を目指すか(対象リビドー)、自我を目指すか(自我リビドー)で分類するといったように、新たな対立軸を持ち出してくる。この時点ではまだ自我欲動は性欲動と対立させたままであるが、のちにFreud (1920) が「自我欲動と性欲動との根源的な対立は不十分なものになった。」と振り返っているように、自我欲動の中に自我リビドーの要素があると気づいたことにより、今までの自らの二元論に疑問を抱き始めているのは明白である。

そしてその翌年、Freudは『本能とその運命』(1915)において、〈愛〉と〈憎しみ〉について論じ始める⁽⁶⁾。「憎しみは対象に対する関係としては愛よりも古い」と述べ、攻撃の源泉となる憎しみは性欲動と区別されるものであり、自我の本質的な構成要素であると結論づけた。Jonesが『Freudの生涯』(1969)において、このことを、「性的本能に対比しうる自我の非リビドー的な部分の概念のはじまりである」と述べたように⁽⁷⁾、性欲動と自我欲動の対立に愛と憎しみの対立を対比させたことにより、Freudは自らの理論の修正を余儀なくされる。そして、今まで述べてきたFreudの欲動論は、1920年に発表された『快感原則の彼岸』において生の欲動と死の欲動という新たな対立図式に結実し、性欲動や自己保存欲動は上述したようにその新たな理論の片割れである生の欲動に組み込まれることとなる。生の欲動を構成する要素は、Freudの中にすでにあったということである。では、死の欲動はどこから導き出されたものなのであろうか。

1-3 死の欲動概念の導入経緯とその必然性

Freudが突如として死の欲動という概念を導入するに至ったのは、Freudの初孫のある遊び、「フォルト・ダー (いない・いる) 遊び」に、謎めいた行為の反復を観察したことに端を発する。Jones (1969) によると、それは1915年9月の出来事であるが、そこでその子どもはひもを巻きつけた木製の糸巻きを巧みに自分のベッドの下に投げ込んで、糸巻きが姿を消す

と、「オー、オー」つまり「いないfort」と叫び、それからひもを引っ張って再び糸巻きをベッドの下から引き出し、それが出てくると、今度はうれしそうに「いたda」と叫ぶ、ということを繰り返し行い続けた。『快感原則の彼岸』（1920）では、この出来事を論議の出発点にしている。これはFreud（1920）が述べるに、「母親との別れと再会」を演じているわけであるが、「母親との別れ」とはその子どもにとって不快でしかありえないような行為である。この子どもの行為は、Freudがそれまで主張してきた快感原則との著しい矛盾を示す。

さらにFreudは、どんな友人にも裏切られる男やいつも同じ結末の恋愛を繰り返す人々、さらに、精神分析治療の際に、治療を中断させようと横柄にふるまい、医師が自分たちにたいしてきびしい言葉と冷淡な態度を示すように仕向けることを試みる患者などに現れる「デモニーッシュ damonisch（悪魔的で非合理）」な特質に注目する。ここでも快感原則はその働きをなしてはいない。

これらの事実を総合した結果、Freudは、今まで提唱してきた快感原則に反して、ある種の強迫が、不快な経験の反復（反復強迫）を生じさせる、という結論に至る。伊藤（1988）によると、それはすなわち、①外傷性神経症者の夢は患者を苦痛なはずの災害の場面に繰り返し引き戻す。②子どもは遊びの中で繰り返し苦痛な体験を反復する。③神経症患者の精神分析治療の間に現れる感情転移状況は、患者に過去の不快な体験を反復させる。④タッソーの叙情詩に見られるように、人間の運命は避けようとしても必ず繰り返される⁽⁸⁾。以上の如き例の中に見られる、苦痛な体験の反復強迫は、「快感原則をしのいで、より以上に根源的、一時的、かつ衝動的である」とFreudは考えた。つまりそれは、自分自身でもコントロールしがたく自らを突き動かす「欲動」によるものだともいえるだろう。これらのデモニーッシュな出来事を説明するためにFreudは「死の欲動」という欲動概念を仮定したのである。

しかしこの理論に対しての批判は多く、論理的飛躍も相まって直系の弟子たちにさえ広く受け入れられることはなかった。Jones（1969）は「臨床的な証拠はあきらかに反対の方向を示している」と言及し、伊藤（1988）も、「これらの事象を死と結び付ける必然性はまったくない」としている。LaplancheとPontalis（1977）は、これら多くの批判を次の三つに大別している⁽⁹⁾。一つめは、メタ心理学的な見地から、緊張の除去が一定の欲動群の属性であるとするこへの反対。二つめは、攻撃性の発生過程を記述しようとする試み。たとえば、攻撃性を、対象によって与えられる挫折から生じる二次的な反応と見ることによって説明しようとする試みである。三つめは、攻撃欲動の重要性和自立性を認めるが、これを自己破壊的傾向と結びつけることはできないとする、つまりすべての生体において、生の欲動－自己破壊の欲動という対立概念を実体とはしない考え方である。

そういった他者からの批判だけでなく、Freud（1920）自身も、当初それを根拠のない「思弁」であり、「仮定」とであると述べ、「私がどの程度信じているのか分からない」「他人にもそれを信じよなどと求めはしない」とさえ語っていたわけであるが、10年後に発表した『文化へ

の不満』(1930)においては、「私の心を強く占領し、これ以外の考え方ができなくなった」と言わしめるほど、死の欲動の存在はFreudの心を強く捉え、彼にとって必要不可欠なものへと変貌を遂げていった⁽¹⁰⁾。

伊藤(1988)はFreudが死の欲動の存在をこれほどまでに主張するに至った内的必然性を「Freud自身の死の恐怖への超克」と考えている。つまり、Freudは死への恐怖に脅かされていて、それを克服し乗り越えるために、この理論に人を死へと向かわせるものの存在を求めたということであろう。事実、Jones(1969)によれば相当強い神経症により、「もう二、三年しか生きられぬ」「六十二歳で死ぬ」といった迷信的な思い込みが、若い頃から晩年に至るまでFreudを支配し続けている。死を不確かなものにしたままではいられない、人を死へと向かわせる「何か」の存在を解き明かしたい、それは疾患(神経症)においてもその原因を性的外傷体験、心的現実を求めるといった原因追求型の立場を貫いたFreudらしい姿勢であると考ええる。

このようにしてFreudが乗り越えようとした死の恐怖の根源は、どこに見出せるであろうか。

1-4 死の欲動とJungの『恐母』

伊藤(1988)によると、それはFreudの幼少期の体験から見出すことができる。Freudの母と乳母への固着、弟の死、死について語り合う相手であった乳母の突然の解雇と投獄、などに起因する幼少期Freudの死への不安を伊藤は引き合いに出し、それら全てが「母に投影された」とし「Freudは自分の内なる『恐母』と出会ったのではないだろうか」とその考えを述べている。

そこから伊藤は、「死の欲動」の理論はFreudからSpielrein、そして最終的には前述のJungの「恐母」へと遡ることができると論じている。Spielreinが1912年に記した『生成の原因としての破壊』において⁽¹¹⁾、一度だけ使用された「死の本能Todesinstinkt」という言葉に、Freudは無意識的な影響を受けたのではないか、ということである。実際Freudは、『快感原則の彼岸』の脚注で、「内容も思想とともに豊富ではあるが、遺憾ながら私には完全には理解しきれぬ業績の中で、ザビーナ・シュピールラインは、すでにこの思弁をことごとくこころみている。」と述べている。

Spielreinの論じた死の本能とは、性本能に潜む否定的な衝動であるものの、死の中にこそ生の源泉があり、破壊の末に生成がある、と、その破壊性の中に新たな生命の萌芽を見出すものとなっている。しかしFreudにとって死は死であり、生と対立するものでしかない。そういった主張の違いもあってか、Freudは、死の欲動の理論はSpielreinに影響されたものとは明確には表明していないが、愛と憎しみ、そして生と死の両価性などといった両者の論文の内容における共通点・対応関係から、FreudがSpielreinに影響されたことは明らかであろう。

そして、そのSpielreinの死の本能は、Jungの「恐母」から発展させられたものであると、Jung自身が『変容の象徴(1956)』の中で述べている⁽¹²⁾。Spielreinも、「彼(Jung)は、エロスの行為に未知の危険が潜んでいることを指摘している」と述べ、自らが至った結論の基盤が

Jungにあるということを認めている。

以上から、Jungの元型理論の一つである「グレートマザー」の、破壊し呑みこむという一側面である「恐母」——それはまさしく死の顕現ともいえる——が、死の欲動論の根源に存在すると考えることは、伊藤の述べるように、可能なことであろう。

それでは、Freudは実際に生の欲動と死の欲動を仮定することから、何を論じたのであろうか。

1-5 生の欲動と死の欲動の混合物

Freud（1923）は死の欲動の顕現として「憎しみを先頭にいただく破壊欲動を挙げるのが関の山」だと、その捉えがたさを述べている。また、「我々が取り扱うのはけっして純粋な欲動の動きではなく、いろいろな度合いで二つの欲動が混じり合ったものである」（Freud, 1926）とし、生の欲動と死の欲動の混合物としてサディズムとマゾヒズムを挙げている^[3]。

その混合物としてのサディズムとマゾヒズムという語句が、Freudの論文において最初に持ち出された時（1914～5年）、マゾヒズムはサディズムよりも副次的なものであり、自分に向けて内面に転じられたサディズム的な衝動であるとFreudは考えた。しかし、死の欲動を自身の理論に導入した1920年以後は、「マゾヒズムは、人間には自己破壊を目的とする傾向が存在することを保証してくれる…するとマゾヒズムの起源は、サディズムよりも古いと考えられるようになる」（Freud, 1933）というように、それらの順序を逆転させ、まず第一次的マゾヒズム、つまり死の欲動のしるしである自己破壊傾向の存在を示唆した。そこには、超自我による「無意識的罪悪感」および「処罰欲求」が見て取れ、Freudによって示された前述の「神経症患者による治療抵抗」もマゾヒズム的願望の表れとすることができるだろう。

そして、サディズムに関連して、「実際に人間は、自己破壊の傾向からみずからを防衛するために、他者や他の事物を破壊する必要があるかのようである」と外界に攻撃性を向けることの必要性を述べている。Freud（1924）は死の欲動が外界に向けられた場合には、それは「破壊欲動、支配欲動、権力意思などと呼ばれる」と述べ、それらがリビドー（生の欲動）と結びついた場合サディズムと呼ばれるとしている^[4]。

またここまで述べたことは、人が破壊衝動を外界に向けて逃がすことが出来なくなった時にその攻撃性は自らに向かい、自己破壊、ともすれば自殺を引き起こすことになる、ということを示している。それは死の欲動に対する生の欲動の敗北とも言い換えることができ、生の欲動と死の欲動の葛藤に常に晒されながら生きている人間がいつか必ず辿り着く「死」という領域への到達を示す。逆に言えば、普段、生の欲動は死の欲動を常に抑え込んでいるわけであり、その状態を維持することが人生を全うすることと意を同じにすることなのであろう。

生の欲動を増幅させ死の欲動を封じ込める、そのために必要な要素とは何であろうか。

1-6 人を愛するという事

それは愛、それも自己愛ではなく対象愛であると考ええる。Freud（1915）は、「自我はもと

もと精神生活のごく初期には本能充足的であり、部分的には自己の本能を自分自身で満足させることさえできるものである。われわれはこれを自己愛の状態と呼び、このような形の本能充足を自体愛的と呼ぶ」とし、リビドーの発達段階に沿って自己愛から対象愛へと移り変わっていくと述べている。それが人間の愛の発達過程だとするならば、対象愛から自己愛への廻り、もしくは自己愛段階への固着は、「より以前の状態へ戻ろうとする」死の欲動の特質によるものといえるだろう。Freudが述べたように、「愛と憎しみは表裏一体」であるから、愛と憎しみを自己完結させるような自己愛の状態は、死の欲動に彩られた状態であり、その内包された憎しみはいずれ自己破壊的に働くのではないだろうか。

反対に、対象に愛を注ぎ、また愛を求める状態は、すなわち生の欲動により生きんとする意思が引き出されている状態とも言い換えることができよう。生の欲動に性欲動を含ませているFreudの態度自体が、それを表しているともいえる。他人に愛を注ぎ、また人から愛されることは、人が生きていく上で必要不可欠なことではないだろうか。

Freudは生の欲動と死の欲動の葛藤の観点から以上のようなことを論じているが、これらのことを基に死を意識し考えることは、翻って「生きるとは何か」を考えることに他ならない。そういった、人間が生きていく上での根源的な疑問をFreudがこれらの理論に込め、そして生きる支えにしたとするならば、それはどういった批判を受けようともFreud個人にとって意義深いことだったのであろう。そして、前述したように批判的な扱いを受けながらも、それはKleinやMenningerなど後に続く人々の考え方に多大な影響を与えた。

では、KleinやMenningerはいったいどのような形で生の欲動と死の欲動論を引き継ぎ、発展させていったのであろうか。

2 Kleinの本能論

2-1 生の本能life instinctと死の本能death instinct

Kleinは『精神機能の発達について』(1958)において、「早期乳児精神過程における、抑えきれない自己破壊と自己保存、あるいは対象を攻撃する力と保護する力とのあいだの戦いの観察から、相互のあいだで争いあう原始的な力がはたらいていることを認めるようになった」と述べている⁽¹⁵⁾。この「争いあう原始的な力」こそ、KleinがFreudの生の欲動と死の欲動を引き継ぎ展開させた生の本能life instinctと死の本能death instinctの概念である。この二つの本能間の葛藤が、自我の発達と密に結びついているとKleinは考えた。

2-2 不安への対抗としての分裂

乳児は、内なる死の本能による破滅への恐れに生まれおちたときからさらされることになり、それは原初的不安を引き起こす。生の本能によってはたらきだす未成熟な自我は、原初的不安をそらすために早期防衛機制を用いて自我自身を分割し、そしてその死の本能を含む部分を外界へ投影する。外界とは、乳児の会合する最初の外的対象すなわち乳房のことである。投影によ

り死の本能の一部を体外へ出してしまうことで、「死の本能に対する恐怖を迫害者（迫害的乳房）に対する恐怖へ変化させる」（Segal, 1977）のである⁽¹⁶⁾。このとき生の本能による乳房へのリビドーの備給も同時に行われ、自我をそうしたように、乳房も良い乳房と悪い乳房に分裂させる。そして、乳房に投影された本能は、迫害不安を支配したいという欲求によりふたたび自我の内部に取り入れられ作用する。このような、「投影と再取り入れによって、自我は豊かになり、強くなる」（Klein, 1958）。この出生のときから作用する取り入れ過程とそれによる内在化は自我の発達を促すとともに超自我の基礎にもなり、超自我は内部に存続する死の本能に対する防衛として使用される。

これらの分裂のプロセスをKlein（1957）は、「生後まもない幼児がある程度の安定性を得るための前提条件」と述べている⁽¹⁷⁾。最初の数ヶ月間、幼児は良い対象と悪い対象を引き離しておくことで、根本的に良い対象を守り、そうして自我の安全性もたかめられることになるわけである。そのためにも、幼い頃の母による授乳体験は必要不可欠であり、その後の人格の成熟に多大な影響を与えるといえるだろう。

2-3 生命破壊的な羨望

こうしたKleinの考えは死の本能の直接の派生物と彼女が見なした、原初的羨望の概念にも密接に関連する。羨望は、幼児の母親との関係のなかで敵意に充ちた生命破壊的な力として現れ、それはとくに食べ物を与えてくれるよい母親に向かう。なぜなら、「その母親は、幼児から必要とされているだけでなく、幼児が自分で持ちたいと思うすべてのものを含んでいることで羨まれるから」（Klein, 1957）である。こうした過度の羨望は、母親を「悪い対象」という一元的な見方でしか捉えられないようにしてしまい、良い乳房と悪い乳房への最初の分裂をさまたげてしまうことになる。すなわちそれは正常な自我発達にも支障をきたすということである。羨望は、生命の源泉を攻撃するわけであるから、死の本能が、直接外界に示されたものの一番最初のかたちであるとも考えることもできる。

この羨望は、心理面接においても見受けられ、Klein（1957）は、過度の羨望による罪悪感をクライアントが感じそれに耐えられない場合、「ただちに分析者は迫害的な人物に感じられ、分析者はさまざまな理由で責められる」と述べている。Klein派のSegal（1977）によると、「羨望は対象と同じように自分も良くなろうとするものであり、それが不可能に感じたらその対象の良さをだめにしておもうと考える」ものである。良いものの源泉それ自体が悪いものになるのである。面接において、セラピストは価値あるものから無価値なものへと変貌を遂げる、それはすなわち生から死への遷移である。そして、クライアントは分析を放棄しようと望み、それ以上に自己破壊的なやり方で行動化するようになり、死はすべての問題の解決法として理想化されるのである。Kleinが羨望の顕現と見なしたこれらの臨床例は、Freudの死の欲動の出発点である「精神分析治療の際のデモニッシュな性格」とほぼ一致する。面接の際に起こってくるクライアントの非合理的な、場合によっては自殺に至るその心の動きを説明するた

めに、FreudもKleinも死の欲動や死の本能という概念を用いることが必要不可欠だったのであろう。

3 Menningerの本能論

3-1 建設的傾向constructivenessと破壊的傾向destructiveness

一方Menninger (1938) は、Freudの死の欲動と生の欲動をそれぞれ、人間の建設的傾向constructivenessと破壊的傾向destructivenessと呼び、とくに自己破壊の究極の形である自殺に注目し論を展開した⁴⁸⁾。破壊的傾向と建設的傾向とを、情緒の面で具現化したものが憎悪と愛である。Menningerは自殺の理論を、「殺したいと思う願望が、外へ向かう機会や、自分で意識していない満足が得られる対象などが、思いがけなく取り去られてしまうと、このような願望を抱いた人へかえて来て、自殺の形で結実する」と説明している。自己に復帰してきた破壊的傾向が建設的傾向を圧倒した場合、その人間は自殺に至るのであろう。これはサディズムとマゾヒズムの項で述べたFreudの考えに通ずるものである。では、どのようにして人は自殺に至るとMenningerは考えたのであろうか。

3-2 死に至る三要素

自殺に至る個人差を、Menningerは攻撃性、罪悪感、性欲の三要素の度合いに理由づけている。この三要素は互いに影響を与え合う。人が他人に対してある種の攻撃を発動させた時、それが実際行われたかどうかに関わらず、その人の良心（超自我）は、同様の攻撃を自我に向かって発動させる。それは罪悪感を引き起こし、苦しみたい、殺されたいという自己懲罰の願望をその人に持たせることになる。そういった破壊的傾向を中和・変容して、自己防衛の手段にしたり、社会の利益になるように調節するのは、愛（性欲的本能）の働きである。

上述のように、建設的傾向が破壊的傾向を中和することが自殺を抑止することにつながるが、この中和が部分的で不完全な場合には、それは部分的または慢性の自己破壊の種々さまざまな形態として現れる。Menningerによれば、「難行苦行を行う禁欲主義、殉教、あるいは何回も外科手術を受けるポリサージェリ、自己毀損、神経症、精神病」などがそうであり、それは慢性自殺とも言える。Menningerが「生ける死」と形容している慢性自殺とは、受難や機能障害等の犠牲を払うことで部分的に自殺した状態となり、全体の自殺を回避することを可能にするものであり、それにより個人の死は無期延期される。この犠牲は、言い換えれば罪悪感を源泉としたつぐないであり、（破壊的傾向が強すぎて）罪悪感が強すぎた場合には、犠牲に捧げるものは自らの命となる。このことから慢性の自殺はその意味が弱められた自殺と言えるだろう。Menningerは、「慢性的自殺の場合には、即発的自殺よりも、性欲的要素が強く、破壊的要素が比較的弱い」「当人は自己の生命を永続せしめる手段であり自殺を回避するための妥協と考えているかもしれぬが、客観的な観察者の眼には、明白な自己破壊として映じるのである」と述べている。

そうした自殺、慢性的自己破壊を抑制するための手段についてもMenningerは論じている。

3-3 そして人は愛を求む

Menningerは攻撃性、罪悪感、性欲に働きかけることで、建設的傾向を引き出し破壊的傾向を抑え込むことが可能になるとし、その方法を模索した。

まず攻撃要素の低減手段として、敵意に満ちたエネルギーを攻撃しても差し支えない対象に向けなおすことを説いた。面接においてクライエントの攻撃性をセラピストが受け止めることや、プレイセラピーにおいてクライエントに攻撃性の自由な表現をしてもらうこともこれに含まれると考える。Menningerも、「攻撃性を処理する手段のなかでもっとも効果的なものは本質的には子供じみたものであるという事実を忘れてはならない。」とし、衝動の捌け口として遊びや仕事の重要性を示唆している。このように攻撃を減退させれば「罪悪感それ自体の減退も期待することができる」とした。

色欲的要素の強化手段として自己愛から対象愛への移行が挙げられる。Menningerは「色欲的発達を禁止するものの第一は、すべてを骨抜きにするような自己愛の作用である」と述べている。自己愛とは「人間の性心理の発達途上で、リビドーは原初の対象物である自己から、自分以外の人またはものに向かって方向転換するものであるが、このような発達未熟のため成人しても自己に定着しているもの」である。自己愛的であるほど、色欲的要素は弱く、それはすなわち破壊的傾向に影響されやすく、死に向かいやすいということである。「自己を愛する心ほど人間の愛を禁止するものはなく、また、自分自身だけに注がれる愛を適正な外界の対象物に向けることほど事態改善の役に立つものはない」というMenningerの言葉通り、そしてFreudが主張したように、他人を愛し、思うことが、生きる希望を喚起することにつながるであろう。それは、前述したように、Freudが生欲動を愛（エロス）や性欲動と言い換えたことと志を同じくする考えである。

4 生の欲動と死の欲動の葛藤

ここまで、Freudに端を発する生の欲動と死の欲動、そしてその発展過程について述べてきたことは、人が生きる上での愛の重要性や人の生と死を考える上で必要なことであるように思われる。人は生きている限り、生の欲動と死の欲動の葛藤に常に晒され続けることになる、それはここまで述べてきたことから明らかである。この「生の欲動と死の欲動の葛藤」こそが、本論のテーマである。「生の欲動と死の欲動の葛藤」という視点から、ある一人の自殺した小説家の作品を通して、その小説家自身の内に蠢いていた欲動の動きの変遷を病跡学的に事例として取り上げる。そして、生の欲動と死の欲動の葛藤のあり方を詳細に論じていくことで、ここまで述べてきた生の欲動と死の欲動の理論がどのように裏付けされていくかを見ていきたい。そのように一人の人間の生き様と理論を照らし合わせていくことが、人の生き死にとその裏にあるものの存在を解き明かし、最初に述べたような「生きるとはなにか」について考える一助

になるのではないかと考える。

Ⅱ 芥川龍之介小説にみる欲動

1 芥川の愛と憎悪の変遷

芥川龍之介は1892年に生まれ、23歳で作家デビューし、師夏目漱石に当時の作品『鼻』を絶賛され、たちまち文壇の寵児となった、大正から昭和初期の時代を代表する小説家である。『羅生門』『蜘蛛の糸』など十年余りの間にさまざまな作品を発表した芥川だが、1927年に35歳という若さで服毒自殺を遂げている。なぜ彼は死ななければならなかったのだろうか、いったい何が彼を死に駆り立てたのであろうか。友人の久米正雄に送られた遺書(『或旧友へ送る手記』)によると、それは「唯ぼんやりとした不安」によるものであった。芥川が感じた「ぼんやりとした不安」の正体とはいったい何なのだろうか。生の欲動と死の欲動は芥川の中でどのように葛藤し、「ぼんやりとした不安」を芥川が感じるに至り、自殺に行き着いたのであろうか。芥川が作品に込めた思いを通して、それを検討していく。そのために、まずは芥川の晩年の作品、『或阿呆の一生』を用いる⁹⁾。

『或阿呆の一生』は自殺の一ヶ月前に書き上げられ、前述の友人の久米正雄に託され、芥川の死後久米によって発表された、芥川の遺稿である。これは、二十歳の頃からの人生を、【一 時代】に始まり【五十一 敗北】で終わる五十一の短章で描いた自伝的小説であり、主人公は〈彼〉という三人称代名詞で統一されているが、それが芥川自身であることは明らかであろう。

芥川の持ち得る愛と憎悪はどのように社会に、人に、自らに対して作用しそして変化していったのであろうか。Menninger (1938) が「建設的傾向と破壊的傾向を、情緒の面で具現化したのが愛と憎悪である」と述べているように、またFreudが愛(エロス)や性欲動はすなわち生きんとする欲動、生の欲動と見なしたように、芥川の愛と憎悪の変遷を見ていくことが、すなわち生の欲動と死の欲動の葛藤を見ることになると思われる。

2 罪悪感を伴う愛

芥川は輝かしい作家としての出発から結婚、平和な生活を得るに至る。しかし妻からの愛だけでは満足できなかったのだろうか、平和な生活も束の間に芥川は女の誘惑に陥っていく。

狂人の娘との関係は、【二十一 狂人の娘】で芥川自身が述べるに「それは決して恋愛ではなかった。もし恋愛でないとすれば——」と言葉を濁しつつ、動物的本能ばかり強い彼女に対し「ある憎悪を感じていた」。そこには、自分を誘惑した狂人の娘に対する愛憎入り混じった気持ちだけでなく、誘惑に負けてしまった自分への憎悪の気持ちも含まれているだろう。この女性との愛は家族(妻)をないがしろにする罪悪感を伴う愛である。山中(1999)も、狂

人の娘の一件によって芥川が「罪業妄想と被害妄想を抱く」ことになったと述べている⁽²⁰⁾。Menninger（1938）が自殺の三要素のうちの一つに罪悪感を挙げたように、倫理に反する愛は罪悪感を伴い、生の欲動ではなく逆に死の欲動を芥川の中で増幅させることになった。それはすなわち徐々に芥川の中の死の欲動が生欲動を圧倒し始めつつあったということである。こうした死の欲動の圧倒は、この時期の作品の不毛とも無関係ではないだろう。

福島（1983）は、この頃の芥川作品には傑作や佳作と目される作品が少ないことを指摘し、「文学史的にはあまり注目されていなかった『妖婆』『影』『奇妙な再会』『妙な話』などに、精神病理学的に見ると分裂病的な体験とみられる記述が多い」と述べている⁽²¹⁾。山中（1999）も福島（1983）も、病跡学の知見から芥川が統合失調症だったことについて論じているが、芥川の統合失調症の兆しは、この頃よりもうすでにあらわれ始めていたということであろう。

この頃、芥川には子どもが生まれるが、出産を目の当たりにした芥川は【二十四 出産】で自分の心情をこう書き表している。「何の為にこいつも生まれて来たのだろう。この娑婆苦の充ち満ちた世界へ。——何の為に又こいつも己のようなものを父にする運命を荷ったのだろうか？」。芥川は子どもの誕生に喜びを感じることなく、このどうしようもない世の中に生まれてきた我が子の苦しみばかり考えている。と同時に、「己のようなもの」という自己卑下のごとき表現には、このどうしようもない世の中においてどうしようもない自分の子として生まれてきてしまった我が子への申し訳ないと思う感情やそれに伴う罪悪感が見て取れる。芥川が晩年に記した『河童』においても、河童の世界では子どもが親の都合ではなく自分の意志で生まれるかどうかを選択できるという設定があり、作中では実際河童の子どもが「僕は生まれたくはありません。第一僕のお父さんの遺伝は精神病だけでも大へんです。」と産まれてくることを拒むシーンが描かれている。山中（1999）のまとめた芥川の生活史によれば、上述のように狂人の娘と関係を持ち、統合失調症の兆しが見られたちょうどその時期から、芥川は自画像として河童の絵を描き出しているのである。このことから、芥川が、生まれてくる河童の「お父さん」に自分を重ねていることは明らかである。つまり、これは子どもの目線による芥川の願望の表れであり、すなわち既に生まれてきてしまっている我が子に対しての懺悔の気持ちの表れではないだろうか。死の欲動の表れとしての罪悪感は芥川の中に留まりつづけ、芥川を蝕んでいった。

また、Menninger（1938）による「人が他人に対してある種の攻撃を発動させた時、それが実際行われたかどうかに関わらず、その人の良心（超自我）は、同様の攻撃を自我に向かって発動させる。それは罪悪感を引き起こし、苦しみたい、殺されたいという自己懲罰的願望をその人に持たせることになる。」という前述の考えは、本節で述べたような倫理に反する愛による罪悪感だけでなく、芥川の持ち得た「攻撃性」による罪悪感や自責の念をも浮き彫りにする。

3 攻撃性による自責

【三十八 復讐】で七年前に絶縁した狂人の娘が一人息子を連れてやってくるが、そこで狂人の娘は遊んでいる一人息子を眺めながら「あの子はあなたに似ていやしない？」と芥川に揺さぶりをかける。実際は芥川の子ではないのだが、関係を持ってしまった後ろめたさがある。過去に狂人の娘に対して抱いていた愛と憎悪が入り混じった感情はそこにはもうなく、今の芥川にあるのは「彼の心の底にはこう云う彼女を絞め殺したい、残虐な欲望さえない訳ではなかった」という憎悪に彩られた殺意だけであった。こうした攻撃性は元来芥川が持ち合わせていたものである。【九 死体】に解剖医の友人と死体を眺めながら、友人の「この頃は死体も不足してね。」という言葉に対して、「己は死体に不足すれば、何の悪意もなしに人殺しをするがね。」という思いを抱いたり、【二十八 殺人】において「殺せ、殺せ。…」という言葉を繰り返したりする描写にそれは見て取れる。攻撃性は、罪悪感とともに前述のMenninger (1938) が挙げた、自殺の三要素のうちの一つである。攻撃性が強いほど、死の欲動は強いと言え、対象を失った攻撃性は自らに向け代わり、人は自らを殺すに至る。それを中和するのが愛であり、芥川の攻撃性も愛によって抑え込まれていたのであるが、生活への興味を失うとともに愛を失っていく。そうして剥き出しの攻撃性が彼自身を包み込んでいくようになり、狂人の娘に殺意を抱くようになっていった。しかしその殺意も、自らの愚かさが引き起こした現状に端を発するものであるから、結局それは狂人の娘に向けられずに自責となって自らに向けられることとなる。芥川は攻撃性を外に逃がすことが、一貫してできないのである。

なぜ彼は攻撃性を他人に向けることができず、自分を責め続けたのか。その裏には、彼の人生を貫いた「孤独」が見え隠れする。その発端は『大導寺信輔の半生』からみる彼の人生最初期に見出すことができる。

4 芥川を貫いた孤独

4-1 母親との関係に起因する孤独

『大導寺信輔の半生』は、1924年、つまり芥川が自殺する約3年前に書き上げられた小説で、その名の通り大導寺信輔という人間の半生を振り返り描いたものであるが、大導寺信輔という人間が芥川自身であることはその内容からも推し量ることが出来る。そしてそこには、芥川の母親や世の中への思いがありありと描写されている。

芥川は母親の乳を吸ったことがなく、牛乳で育てられた。そのことを「憎まずにはいられぬ運命」と語っている。『点鬼簿』の冒頭で、「僕の母は狂人だった」と記していることにも、芥川にとっての母親がどういうものだったかということが表れている。福島 (1983) は、このことが「芥川に三重の影を投げかけた」と述べている。第一は生物学的な「遺伝の影響」である。それは晩年芥川自身も統合失調症と思われる状態になったことの原因となっていよう。第二は、「母子関係の問題」である。福島が「子供の性格に基本的な安心感や自信を育てることが困難

であったと思われる」と述べているように、母との満足な接触や授乳が得られなかった芥川は、人間関係の形成においての根本的な傷つきを乳幼児期に体験していたのである。第三は、「精神病恐怖」である。精神病がもっぱら遺伝によると考えられていた時代であるから、自分も精神病になるのではないかという不安や恐怖が常に芥川を包み込んでいたと考えられる。

このように、精神病の母親が芥川に与えた影響は計り知れない。そこに安心はなく、ただただ芥川にとって母親は畏怖すべき対象だったのではないだろうか。そしてこの事実は、Freudの死の欲動の根源を辿ればJungのグレートマザーに辿りつくように、破壊し呑みこむ「恐母」としての母親を確固たるものとし、幼少期からすでに芥川の中を死の欲動が覆い尽くすことになったのではないだろうか。

授乳を経験していないことによりKleinの述べているような「良い乳房と悪い乳房の分裂」も行われず、良い対象を自らの中に取り込むことができなかった。それは、Klein（1963）が述べているように自らの良い部分を保護し維持することが不可能な状態につながる²²。そうして、自らの中の良い部分を保護できなかった場合、Kleinの言葉を借りるならば「死の本能への偏り」により自分自身が「悪い存在」となる。Kleinが、「一般的には、孤独は所属する人物や集団がないという確信から派生してくる、と仮定されている」と述べているように、孤独とは「所属感のなさである」と言えるであろう。自分でさえも嫌悪し畏怖すべき存在だと思いがあつたならば、そこには当然所属感など生まれ出てきようもない。Kleinは統合失調症者について、「彼は自分の原対象（母親）を良い対象として十分に内在化できず、したがって安定性の基礎を欠いてしまう結果に陥る。つまり、彼は外的な良い対象にも、内的な良い対象にも、また、自分自身の自己にも頼ることができない」と言い表しているが、これはまさしく幼少期の、そして以後の芥川のことを端的に言い表している。前述のように、芥川が病跡学の見地から見て統合失調症であったということは、ただの偶然ではないだろう。

4-2 死の恐怖を乗り越えられなかった芥川

こうして母親との間で愛の傷つきを経験した芥川は、「何を知らぬにもせよ、母の乳だけは知っている彼（芥川）の友だちを羨望した」と『大導寺信輔の半生』で述べているように、小学生の頃から同年代の友人に羨望を向けるようになる。他人に過度の羨望を向けることしかできなかった芥川にとって、世の中は「悪い対象」で溢れかえり、そこから取り入れ自らの「良い部分」を育てることはもはや不可能なことになったのではないだろうか。そんな芥川に、人との関わりにおいて安心など感じられようはずもなく、そこにあるのは孤独だけだった。この世とのつながりの感じられなさは芥川を消耗させ、徐々に死に近づけていった。

そしてまた、Freudが自らを支配する死の欲動の存在を仮定したように、芥川もまた「自分たちを支配している力」を感じ、それを「悪魔」と呼び恐れたのである。Freudが死の欲動を見出しその存在を主張した内的必然性を、伊藤（1988）は「Freud自身の死の恐怖への超克」、つまり死の恐怖を乗り越えるための手段だったと考えているように、芥川もまた死への恐怖に

対抗するために「自分達を支配している何か」の存在を仮定したのではないだろうか。そういう意味で、芥川はFreudと同じように、自らを支配する死の欲動の存在に気付いていたとも言える。ただ、Freudは死の欲動を公式化することにより、死の恐怖を乗り越えたわけだが、芥川に関してはそれを「悪魔」と仮定しただけで、それにより死の恐怖を乗り越えられたわけではなかった。むしろ、その悪魔という存在に常に苛まれ、心身ともに消耗していく一方であった。「自分の背後にあるもの」を理論化し、味方につけ人生を全うしたFreudと、それに怯え続け自殺するに至った芥川との違いがここにあるのではないだろうか。

そして芥川は、狂人の娘を通して直面した「悪魔」的な、それはまた、Freud (1920) の述べるところのデモーニッシュ *damonisch* と意味を同じくするものであろう「運命」に対して「不安」を感じるようになる。

4-3 重なり合う孤独と不安

『或阿呆の一生』は【五十一 敗北】で終わりを迎える。そこにはもはや人間としての尊厳を精神的にも肉体的にも失いかけている死目の芥川しか描かれていない。まさに、死の欲動に「敗北」した一人の男の姿がそこには描かれている。遺稿となった『歯車』で、芥川は自身を包む運命と不安について述べている。『歯車』に話の筋やストーリーといったものはこれと言って存在しない。幻覚として見える「歯車」に怯え、「何ものかに狙われている不安」に怯え、主人公(芥川)が次第に死に追い詰められていく様子をただただ書き綴った作品である。芥川が見る歯車の幻覚は不安が具現化したイメージである。

不安とは対象のないものであり、それは漠然としている。「よくわからないもの」「とらえられないもの」といったように、対象がなく把握できないからこそ、それは人に未知なるものから与えられる脅威と破滅への恐れを抱かせる。破滅への恐れとはまさにKlein (1957) が述べたように死の欲動によるものであり、不安とは死の欲動の表れであるといえるだろう。こうした『歯車』における不安、それはまた芥川の遺書に記された自殺の原因「ぼんやりとした不安」と意を同じくするものである。そしてこれこそが、生まれて間もなくの芥川が、本来ならば母親を介して体外に出すことで解消される原初的な不安を処理できなかったことに対する結果であり、その結果逸らすことができず体内にとどまり、孤独とともに増幅され続けた死の欲動ではないだろうか。さらに、山中 (1999) が「Freudに従えば彼の不安は、幼児期の外傷体験、とりわけ、彼の母親とのかかわりにおいてのそれに帰せられるであろう」と述べているように、原初的な不安だけでなく、前述の狂人である母親とのかかわりもまた幼少の芥川に更なる不安を与え、その重なりあった孤独や不安は以後芥川の人生を貫くことになったのではないだろうか。

そして、「ぼんやりとした不安」に包まれ、肉体的にも抗うことができなくなった芥川はついに薬物自殺を図る。しかし、それは芥川の本意だったのだろうか。本当は芥川は生きようと必死にもがいていたのではないだろうか。

5 生きるための愛の必要性

抜け出しようのない孤独にさらされながらも、「自らの迷信や感傷主義と闘おう」とした芥川は、いかなる思いで晩年の作品を執筆していたのであろうか。

『歯車』『玄鶴山房』において、芥川は主人公に死を望ませていながら、あえて回避させている。それまでの『地獄変』や『河童』では、主人公や登場人物に自殺させていたにもかかわらず、最晩年の作品では、主人公たちに自殺を選択させていないのである。それは人としての尊厳を重んじ、生を生き抜こうという芥川の、死の欲動に抗わんとする気持ちの表れではないか。

『玄鶴山房』では自殺を決行するも、子どもにその現場を見つけられ踏みとどまる。ここでの子どもはまさしく生の欲動として、主人公に生きる希望を与えている。芥川が子どもにこの役割を与えていることは意味深い。『河童』の出産に見られるように、芥川が我が子に持っていたのは、懺悔や悔恨など、後ろめたい感情ばかりであった。そんな自分には子供に対して希望を抱く資格などない、という決意の裏返しとしての芥川の願望が『玄鶴山房』に表現されたのではないだろうか。子どもという存在が、この作品だけでなく、芥川自身にとっても救い手であったならば、と思わざるを得ない。芥川作品を通して、このような孤独への抵抗とでも言うべき態度は端々に見て取れる。芥川の孤独を脱しよう、という強い思いを感じる。

芥川は時代の波に翻弄され世の中に絶望しながらも、必死にもがき、生きようとした。筆者にはそう思えてならない。しかし肉体的健康を損ない、死の欲動に抗うすべは芥川にはもう残されていなかった。その果てに薬物自殺を選択せざるを得なかった芥川は、生を生き抜くことを諦めたのだろうか。しかし、それは自らを包む運命への抵抗でもある。自らの手で死を選ぶということは、その運命から生の自由を奪還するということでもあり、それこそが死の欲動に人生を通して翻弄され続けた芥川にとって最後に唯一行うことができた、「生への敬意」を表す行動だったのではないだろうか。

おわりに

ここまで、生の欲動と死の欲動の葛藤という観点から芥川作品、そして芥川龍之介自身やその死について論じてきた。芥川の死は、精神障害や統合失調症に始まり、吉本（1958）²³の「出身コンプレックス」などの枠組みで今までさまざまに論じられてきた出来事である。「統合失調症が原因で」「出身コンプレックスのせいで」という考えも、芥川の死を捉えるにあたって、ひとつの重要な視点であるように思う。しかし、そういった病理や出自のレベルで芥川の死をとらえることより、もっと人間の原初的で根源的な部分に焦点を当てたFreudの欲動論という視点から、芥川龍之介という文豪の死への道行き、その過程を語ることに意味があるのではないだろうか。

晩年の芥川は心身ともにボロボロになりながらも、最後まで作品を生み出し続けた。その生

と死の狭間ともいえる状態で生み出した作品群が人々の心を揺さぶり、今なお高い評価を得ているように、その芥川を語るに当たって、人間の本質的な要素である生と死という観点からみようとすることは有効な視点であるといえるであろう。前述の死の欲動概念へのさまざまな批判の中には、Bibring (1941) の「我々の前にある全ての事実を説明するためには、攻撃本能と破壊本能の考えのみで充分」⁽²⁴⁾といったものもあるが、芥川に関しては、およそ攻撃性だけでは語り尽くせぬと言わざるを得ない。

そして、生の欲動と死の欲動の葛藤という視座から芥川をみていく過程で、第一章で述べたようなFreud、そしてKleinやMenningerの理論との共通性がいくつも見出された。ここに至るまで出来る限りそれを述べてきたが、本論でそのすべてを網羅できたわけではない。しかし、芥川が感じていた「ぼんやりとした不安」の正体は、本論で述べてきたような芥川の深い孤独と密接に関わっていると言えるであろう。

芥川は孤独や不安に苦しみ、そこから脱却するために愛を求め続けた。人との関わりを苦痛に感じ孤独に甘んじようとも、どこかで人は人を求めてしまう。それはまた人に内在する生の欲動によるものだともいえるであろう。生の欲動の顕現である愛を、人は欲しているのである。

人は、内に蠢く生の欲動と死の欲動の葛藤に晒されながら、自らの人生を生きる。「生きるとは何か」、そのことについて考えたとき、本論で芥川龍之介を扱い、そして今まで述べてきたことから導き出される一つの答えとして、「生きるとは『愛の探求』である」と結論づけることは可能ではないだろうか。愛の探求を志半ばで諦めざるを得なかった芥川龍之介という一人の人物を通して、逆説的に生きることの尊さ、難しさを問う。今回のこの結論は芥川龍之介を扱った結果導き出されたものであり、普遍的なものであるとは言い切れないであろう。そういった意味も含め、今後、生の欲動と死の欲動の葛藤を「愛」というキーワードで読み解いていくことを課題とする。

[注]

- (1) Freud, S. (1920) : Jenseits des Lustprinzips. 小此木啓吾 (訳) (1970) : 快感原則の彼岸 Freud著作集第6巻 (pp. 150-194) 人文書院
- (2) Freud, S. (1938) : Abriss der Psychoanalyse. 小此木啓吾 (訳) (1983) : 精神分析学概説 Freud著作集第9巻 (pp. 156-211) 人文書院
- (3) Freud, S. (1923) : Das Ich und das Es. 小此木啓吾 (訳) (1970) : 自我とエス Freud著作集第6巻 (pp. 263-299) 人文書院
- (4) Freud, S. (1910) : Die psychogene Sehstörung in psychoanalytischer Auffassung. 青木宏之 (訳) (1983) : 精神分析的観点から見た心因性視覚障害 Freud著作集第10巻 (pp. 195-200) 人文書院
- (5) Freud, S. (1914) : Zur Einführung des Narzißmus. 懸田克躬・吉村博次 (訳) (1969) : ナルシズム入門 Freud 著作集第5巻 (pp. 109-132) 人文書院
- (6) Freud, S. (1915) : Trieb und Triebchicksale. 小此木啓吾 (訳) (1970) : 本能とその運命 Freud著作集第6巻 (pp. 59-77) 人文書院

- (7) Jones, E. (1957) : The life and work of Sigmund Freud. 竹友安彦・藤井治彦（訳）（1969）：フロイトの生涯 紀伊國屋書店
- (8) 伊藤良子（1988）：「死の欲動」論の彼岸 山中康裕・斎藤久美子（編） 臨床的知の探究 河合隼雄教授還暦記念論文集 下 創元社 233-257
- (9) Laplanche, J. et Pontalis, J. -B. (1976) : The Language of Psycho-Analysis. 村上仁（訳）（1977）：精神分析用語辞典 みすず書房
- (10) Freud, S. (1930) : Das Unbehagen in der Kultur. 浜川祥枝（訳）（1969）：文化への不満 Freud 著作集第3巻（pp. 431-496）人文書院
- (11) Spielrein, S. (1912) : 生成の原因としての破壊 村本詔司（訳）（1988）：花園大学研究紀要, 19, 21-72
- (12) Jung, C. G. (1956) : Symbole der Wandlung. 野村美紀子（訳）（1985）：変容の象徴 筑摩書房
- (13) Freud, S. (1926) : Hemmung, Symptom und angst. 小此木啓吾（訳）（1970）：制止, 症状, 不安 Freud著作集第6巻（pp. 320-376）人文書院
- (14) Freud, S. (1924) : Das okonomische Problem des Masochismus. 青木宏之（訳）（1970）：マゾヒズムの経済的問題 Freud著作集第6巻（pp. 300-309）人文書院
- (15) Klein, M (1958) : On the Development of Mental Functioning. 佐野直哉（訳）（1996）：精神機能の発達について 小此木啓吾・岩崎徹也（編訳）（1996）羨望と感謝 メラニー・クライン著作集5（pp. 91-102）誠信書房
- (16) Segal, H. (1973) : Introduction to the work of Melanie Klein. 岩崎徹也（訳）（1977）：メラニー・クライン入門 岩崎学術出版社
- (17) Klein, M (1957) : Envy and Gratitude. 松本善男（訳）（1996）：羨望と感謝 小此木啓吾・岩崎徹也（編訳）（1996）羨望と感謝 メラニー・クライン著作集5（pp. 3-89）誠信書房
- (18) Menninger, K, A (1938) : Man Against Himself. 草野栄三良（訳）（1963）：おのれに背くもの（上）（下）日本教文社
- (19) 芥川龍之介（1968）：芥川龍之介集（現代日本文学大系43） 筑摩書房
- (20) 山中康裕（1999）：芥川龍之介の病跡——不安と苦悩とその実存——心理臨床と表現療法（pp. 199-251）金剛出版
- (21) 福島章（1983）：病跡学から見た芥川龍之介 国文学 解釈と鑑賞, 48（4）, 169-174
- (22) Klein, M (1963) : Sence of Loneliness. 橋本雅雄（訳）（1996）：孤独感について 小此木啓吾・岩崎徹也（編訳）（1996）羨望と感謝 メラニー・クライン著作集5（pp. 179-194）誠信書房
- (23) 吉本隆明（1958）：芥川龍之介の死 国文学 解釈と鑑賞, 23（8）, 2-8
- (24) Bibring, E (1941) : The development and problems of the theory of the instincts, Int. J. of Psycho-Anal vol. 22

（ちょうぎょうじ けんた 教育学部研究科臨床心理学専攻修了）

（指導：牧 剛史 講師）

2009年9月30日受理